

はしがき

本報告集は、21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏の形成と地球化」およびそのサブプログラム「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」(Asia in Russia / Russia in Asia 略称AIRRIA)の一環をなすとともに、北海道大学から2005年度重点配分経費の支援をも得て実施しつつあるプロジェクト研究「北海道とサハリン州：相互理解に資する歴史記述を求めて」の中間報告書である。

2005年度重点配分経費の支援をうける形でサハリン・樺太史の再検討を主題とするプロジェクト研究を構想するにあたっては、この研究が北海道大学における過去の研究蓄積を踏まえた新たな展開となるべきこと、新たな展開の目標としては日本における当該分野の研究者を糾合した共同研究によってサハリン・樺太史の通史記述を目指すこと、その一方で国際貢献の意義をも担う隣接地域間の歴史学分野における国際的な共同研究でもあること、この三点に配慮した。

21世紀COEプログラムは「拠点形成」を謳っているが、「拠点」の「形成」をめざすというとき、過去に培われた既存の蓄積とそれに付加される新たな蓄積との関係を明示できることが望まれるであろうと考える。幸いにして北海道大学は、研究対象としてのサハリン（樺太）地域に関して附属図書館北方資料室という抜群の資料基盤に恵まれ、スラブ研究センター（以下、センター）、文学研究科、教育学研究科、総合博物館など多部署にわたって現地研究機関との学術交流の経験も豊富である。先達の業績をみれば、遠く高岡熊雄『樺太農業植民論』（1935年）に代表される戦前期「北大樺太学」にまで遡る長い伝統を有し、比較的近年においては秋月俊幸『日露関係とサハリン島：幕末明治初年の領土問題』（筑摩書房、1994）から村上隆『北樺太石油コンセッション1925-1944』（北海道大学図書刊行会、2004）に至る重厚な地域史研究の流れが息づいている。

新たに付け加わった蓄積の一つとして、2004年7月29～30日にセンターで開催されたAIRRIA第5回研究会がある。「サハリン・樺太の歴史」特集と銘打ったこの研究会は、学内と学外を問わず若手研究者を中心として個別専門分野ごとに本格化の萌しをみせている日本のサハリン・樺太史研究に総結集の場を与える試みであった。日本のサハリン・樺太史研究は共同研究としては、これをもって実質的にスタートを切ったのである。

今年（2005年）はポーツマス条約締結から100年、第二次大戦におけるソ連の対日参戦から60年を数え、サハリン・樺太の歴史にとっても節目の年であった。しかし翻って歴史記述の動向を回顧してみると、代表的な英語文献 John J. Stephan, *Sakhalin. A History* (Oxford, 1971) とロシア語文献 M. Vysokov et al., *Istoriia Sakhalinskoi oblasti (Iuzhno-Sakhalinsk, 1995)* がそれぞれ34年前、10年前に刊行され、日本語訳もそれぞれ32年前、5年前に出版されている（それ自体いまから見ればすでに古くなっている）のに対して、日本の研究者によるサハリン史研究はいまだ自前のベーシックな通史をもっていないのが現状である。しかも最大の問題は、

わずかな例外を除けば、ロシア側のサハリン郷土史研究と日本側の樺太史研究が相互に接点をもたず、それぞれの言語で、それぞれの自己完結的な空間を築いてきた点であろう。例えば日本側では日本統治下の時代をそれだけ切り離し、この時代の樺太史を日本史の外延として論ずる傾向が強い。たしかに、日本史の外延という性格づけによって、日本の海外植民地の相互比較や、北海道植民の延長としての樺太植民といった論点が浮き彫りになる。しかし一方で、この時代の通時的な位置づけ、また国境を接して隣り合う南北サハリンの地域間関係を視野の外に置くことになりかねない。

このように非対称的な関係にあり、相互の動向に無関心でさえあった研究の現状を少しでも打開するには、まずもって相手地域に蓄積されてきた郷土史・地方史研究の学問的成果を摂取し、自らの内にある認識の空白を埋めることが先決であろうと考える。

2005年度重点配分経費は、「戦略的プロジェクト研究の推進」を主眼とするが、4区分からなるその枠組みの中には「国際貢献に関する研究の支援」という区分もある。国際貢献をキーワードとする当該研究の位置づけに関しては、次のように考えた。国境を挟んで一衣帯水の関係にある北海道とサハリン州は、資源開発、環境保護、貿易振興、安全保障、自治体交流などの分野で、近年ますます密接な国際的相互協力が求められ、しかも両地域間には未解決の領土問題という「トゲ」の部分もある。こうした状況下で（国家間の関係はしばらく措くとして）地域間に安定的な関係を築くには、相手地域との相互理解を深めることが不可欠である。研究教育現場から発信しうるその一つの手立てとして、歴史像の共有を視野に入れつつ、まずは史実に基づく対話から出発する歴史学分野の国際共同研究が相互理解の根底をなす営みとなるのではないか。境界を跨ぐ（trans-border）地域研究を意図的に進めてきたサブプログラムAIRRIAをバックグラウンドとするとき、サハリン（樺太）は、その意味で十分に国際貢献の意義を担うフィールドとなるに違いない。

区分「国際貢献に関する研究の支援」の募集に対して、本プロジェクト研究は「北海道とサハリン州：相互理解に資する歴史記述を求めて」という題目を付し、おおむね以上の三点を強調する申請書類を提出した。ちなみに、この区分の募集に対しては13件の申請があり、書面審査、1次選考、2次審査（ヒアリング）を経て当該プロジェクト研究が1件のみ採択されたとのことである（『北大時報』No.617 [2005年8月]）。

さて、当該プロジェクト研究は、具体的には、1)国際ワークショップの相互開催、2)文書館・図書館の相互利用、3)サハリン・樺太史セミナーの随時開催、4)出版計画の策定、の4点の実施を掲げている。ここでは、すでに一定の成果を挙げている1)～3)について途中経過を記すことにする。

1)と2)については、研究組織に属する6名のうち1名が9月下旬、他の5名が11月上旬にユジノ・サハリンスクに出張し、サハリン国立大学、サハリン州国立文書館、サハリン州郷土誌博物館、チェーホフ「サハリン島」博物館とのあいだで研究交流を深める機会を得ることができた。とくに、「日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史」と題する北海道大学・サハリン国立大学共催のシンポジウム（2005年11月1～2日）は、サハリン国立大学のB. P.ミシコ

フ学長がその開会の辞で言及したように、この分野におけるはじめての国際シンポジウムとして意義深い企画であった。

巻末に掲載するプログラムに見られるように、報告者は日本側から4人、ロシア側から9人、合わせて13人にのぼる。使用言語はロシア語と日本語により、通訳は双方の通訳陣がつとめた。日本側で通訳に当たったのは、荒井信雄（センター）とB. A. ワシレフスカヤ（北大文学研究科修士課程）である。シンポジウムを成功裡に準備するについては、サハリン国立大学のB. コルスノフ、E. H. リシツィナ両副学長、とりわけM. C. ヴィソコフ歴史学部長から多大のご理解とご協力をいただいた。日本側では渡航の準備から一行の帰国まで全般にわたって荒井信雄の献身に支えられた。日本語ペーパーのロシア語訳文作成では、O. バトバヤル（北大文学研究科博士後期課程）、Г. ウルツィネメフ（北海道大学教育学博士）のお二人のご協力をえた。

3)については、上述のAIRRIA第5回研究会を先行例とし、当該研究プロジェクトの発足後センターにおいて「サハリン・樺太史セミナー」を2005年9月17日と12月3日の2回開催した。報告件数は合わせて10件、各研究テーマは多岐にわたるが、ここでは報告者とその所属を列挙するにとどめる。

梅木孝昭（武四郎の道研究会）、M. ヴィソコフ（サハリン国立大学）、望月恒子（北大文学研究科）、竹野学（北大経済学研究科）（以上「サハリン・樺太史セミナー(I)」）。

山田伸一（北海道開拓記念館）、原暉之（センター）、小山内道子（北海道教育大学釧路校）、塩出浩之（法政大学文学部）、池田裕子（北大教育学研究科博士後期課程）、井澗裕（センター非常勤研究員）（以上「サハリン・樺太史セミナー(II)」）。

本報告集は、以上の研究活動に基づいて、11月1～2日のシンポジウム「日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史」に提出された13編のペーパーを中心に編集し、それに加えて寄稿論文2編、資料紹介1編を収録した。シンポジウムのペーパーは、ロシア側の各報告が短めであったのに対し、日本側の各報告は概して長めであり、会場での口頭報告はそれを縮約するケースが多かった。この点の非対称性は問題なしとしないが、日本側の各報告についてもフルペーパーを掲載することにした。ロシア側各報告の日本語訳は、E. H. リシツィナ、Ю. Ю. アーリン、M. B. テチュエワ、O. Ю. チェルニコワ、H. B. ポタポワ、Л. B. ドラグノワの6報告については荒井信雄、E. И. サヴェリエワ報告については望月恒子、H. B. イパチエフ、И. P. スコロバチの2報告については原暉之が分担した。参加者の池田裕子が会場でとった口頭報告の速記も本報告書の作成に役立った。

日本統治期の樺太（南サハリン）について、ロシア側でも各分野の専門家が研究を進めていることを直接に知ることができたのは、今回のシンポジウムの副産物であった。ロシアの日本統治期南サハリンの専門家たちは、彼らの研究において、樺太庁編『樺太庁施政三十年史』（豊原、1936年）のロシア語訳を利用し、それに立脚して論を展開することが多いこともわかった。シンポジウムの日本側参加者たちは『樺太庁施政三十年史』にロシア語訳があること自体を知らなかったが、それを典拠とする論の展開については慎重とならざるをえないという印象をもつ

た。日本側でこの点を補うため、竹野学は荒井信雄と協力して『樺太庁施政三十年史(露語訳)』について」を作成し、末尾に補注を付した。

資料紹介では、**2005年**にユジノ・サハリンスクで刊行された『私の数字でも役立つことがあるかもしれない…**1890年**チャーホフによるサハリン住民調査資料』という浩瀚にして、かつ内容的に類い稀なる書物について、チャーホフ研究者の望月恒子が一文を寄せた。ロシア側のE. И. サヴェリエワ報告を補足する意味をもつ資料紹介である。

順不同になったが、巻頭に配した**2編**の寄稿論文について一言だけ言及すれば、まず麓論文は、ロシア国立海軍文書館（在サンクトペテルブルグ）の所蔵する「プリアムール地域の問題に関する特別審議会」議事録と日本側の資料文献をクロスさせて、維新政府成立期におけるロシアのサハリン島政策を分析し、「日露雑居」下にあった同島をめぐる日露関係に光をあてている。塩出論文は、これまで研究の少なかった政治史の立場から、日本統治下における樺太の参政権獲得運動と本国編入問題に本格的な分析のメスを入れている。サハリン・樺太をフィールドとする日本史研究者のあいだに興りつつある新たな波動をうかがわせる寄稿論文を**2編**も掲載することができるのは誠に喜ばしい限りである。

2004年12月に刊行した『21世紀COEプログラム研究報告集』No.5（「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア(II)」）も、やはり「サハリン・樺太の歴史」特集を中心に編集した。この流れから言えば、本報告集はその続編をなす「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア(III)」と名づけることも可能だったが、ユジノ・サハリンスクのシンポジウムで生まれた研究交流の絆を永く心に留めるとともに、札幌開催予定の次回シンポジウムから生まれるであろう続編のことも考慮して、本報告集の題名は「日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史(I)」とした。

編集の実務は、井濶裕が担当した。本報告集の刊行に向けてご助力いただいた皆様に感謝の意を捧げたい。

2005年12月27日

編集者 北海道大学スラブ研究センター
原 暉之

〔凡例〕

本報告集中で使用されている文書館などの略称

Российский государственный военно-исторический архив (РГВИА)

ロシア国立軍事史文書館、モスクワ

Российский государственный архив военно-морского флота (РГАБМФ)

ロシア国立海軍文書館、サンクトペテルブルグ

Российский государственный исторический архив Дальнего Востока (РГИА ДВ)

ロシア国立極東歴史文書館、ウラジオストク

Государственный архив Сахалинской области (ГАСО)

サハリン州国立文書館、ユジノ・サハリンスク

Сахалинский областной краеведческий музей (СОКМ)

サハリン州郷土誌博物館、ユジノ・サハリンスク

Сахалинский центр документации новейшей истории (СЦДНИ)

サハリン現代史資料センター、ユジノ・サハリンスク